

## 「話本」と「金瓶梅」

荒 木 猛

### Hua pên（話本） and Chin p'ing mei（金瓶梅）

Takeshi ARAKI

#### はじめに

「金瓶梅」の作者は誰なのか。「万曆野獲編」に言うように、この人は大名士なのか、それとも無名の文人だったのか。その執筆時代はいつなのか、嘉靖時代なのか、はたまた万曆時代なのか。してまたその執筆動機は何か、その動機に果して政治的諷刺の要素があったのか無かったのか等々の諸問題について、これまでいろいろと論じられてきており、その論文の数も今日までおびただしい量になるが、残念ながら、いずれも未だ万人肯首しうる結論を得るには至っていない。ところで、これらの問題は、いずれも「金瓶梅」という作品の性格を規定する上において欠かすことのできない程基本的な問題ばかりではある。しかしまた、いずれの問題もそう早急且つ簡単に円満なる結論が得られる見通しも今の所ないのである。従って、今暫くこれらの問題をおき、その追求を他日に譲るとして、本小考では、「金瓶梅」の作者がどのようにしてこの作品を作りあげたか、その創作手法上の特色を明らかにしてみたいと思う所存である。

知られる如く、これまで「金瓶梅」は、「三国演義」「水滸伝」「西遊記」とともに、「四大奇書」の一つに数えられてきているが、その成立の仕方が他の三書と大いに異なる。つまり「三国演義」「水滸伝」「西遊記」の三小説は、いずれも初めから読者を意識して執筆されたものではなくて、宋の講師師による語り物に由来し、彼等の間で語り継がれているうちに話に尾ひれが付き、次第にその話の量をふくらませ、明代で集大成されたものばかりである。これに対し「金瓶梅」は、「水滸伝」の23回から25回までの西門慶と潘金蓮物語に由来している。ここで興味深いことは、誰だか未だ分からぬが、この「水滸伝」の一節に

ヒントを得て、一篇の長篇の作品即ち「金瓶梅」を作ろうとした人間のいたことを想定できることである。勿論、「三国演義」「水滸伝」「西遊記」においても、最終的に現在の姿にまとめあげた人物がいたと思われる。しかし、彼らの功績は、主に宋以来の話を集大成し、それを明代になって急速に発達した口語表記の文体によって著した点にある。これに対し「金瓶梅」は、明代以前の発達の歴史をもたない。ある作者の創意と工夫とによって明代に忽然と現われた作品であるといえる。まことに、中野美代子氏がかつて指摘されたように、「金瓶梅」こそ、聴衆ではなく読者を予想した一人の作者が書いたもので、作者と読者の一対一の関係が成立した中国で最初の小説である。その意味において「金瓶梅」は、民国の魯迅以降の近代小説の先駆的な存在であり<sup>①</sup>、この点で、中国小説史上特筆すべき作品と目されるのである。

さて、本題に戻ろう。この作者は、一体どのようにして「金瓶梅」を書きあげたのであろうか。先にも述べたように、まず作者は、ストーリイの発端を「水滸伝」の西門慶・潘金蓮物語に求めている。さらに、パトリック・ハナン氏の研究に依れば、この作者は「金瓶梅」の中でこの「水滸伝」の外に、口語の短篇小説や戯曲・俗曲等を素材として駆使しているということが明らかになっている<sup>②</sup>。筆者もかつて、「金瓶梅」の素材となったもののうち、俗曲と戯曲「林冲宝剑記」、それに「大宋宣和遺事」について調査し、「金瓶梅」の作者が使ったであろうと思われる個所を指摘したことがある<sup>③</sup>。それで今回は、主に「水滸伝」を含む各種「話本」<sup>④</sup>からどれだけ作者が素材をあおいでいるかについて考察してみたい。

結論から言うならば、作者は、「金瓶梅」を作るにあたって、恐らく手元で見ることのできた各種「話本」から多く、その話の筋や着想、人物形象についてヒントを得ているのみならず、甚しくは、その「話本」に使われている詩詞・駢語<sup>⑤</sup>の類いを直接借用している。この傾向は、「水滸伝」からにおいて甚しく看取されるものである。以下、「金瓶梅」における「話本」からの影響を、1. 筋や着想面における影響、2. 詩詞・駢語鈔襲の傾向 の二方面から見てゆくことにしたい。

### 1. 筋・着想面における「話本」からの影響

「金瓶梅」の作者がもとずいたであろう「話本」についても、前記パトリック・ハナン氏をはじめとする幾多の学者によって既に指摘ずみの点が多い。しかし、本稿では繁雑になることを避けて一一注記することはしないことを、まず予めお断りしておきたい。では、「金瓶梅」の作者は、この小説を創作にする

にあたって、その筋や登場人物の人物形象に関し、いかなる「話本」のどの個所からヒントを得ているか、1回から見てゆくことにしよう。

まず、1回書きだしの一詞「眼児媚」とそれに続く情と色との談義は、「清平山堂話本」勿頸鴛鴦会の書きだしの部分をほぼそのまま踏襲している。次の項羽と劉邦の話は、一代の英雄豪傑といえども、女色に迷って身を亡ぼすことを述べて、さきの「眼児媚」詞の説明としているが、この部分は、恐らく「大宋宣和遺事」冒頭に書かれている歴代の無道皇帝を述べた所よりヒントを得ているのではないかと疑われる<sup>⑥</sup>。次に本題に入って、最初の話である景陽岡における武松の虎退治の一段は、明らかに「水滸伝」の23回を踏襲している。ここで注目されることは、次の二点である。その一は、武松が虎を退治した後、獵師らとともに土地の旧家に向かうが、「水滸伝」では、この土地の旧家のことを「本郷上戸」と書いている所を、「金瓶梅」ではすべて「里老人」と書き換えていることである。知られる如く、里老人とは、明代、鄉村社会の秩序維持の為に選ばれた徳望家で、勸農教化の任務をもった人のことである。「上戸」を「里老人」に書き換えているということは、やはり、明代のある人間が「水滸伝」からヒントを得て「金瓶梅」を創作したもので、この「金瓶梅」が、けっして「水滸伝」等と同じような宋講釈より発展してきたものではないことの一証拠となるであろう。注目されることの二は、武松の出身地を、「水滸伝」の清河県から、「金瓶梅」では陽谷県に変えていることである。この事実については、すでにハナン氏や、魏子雲氏ら<sup>⑦</sup>の注目する所となっているが、このことがどのような意味をもつかについては、未だ明確な結論が得られていない。ただ言えることは、作者は、この後の西門慶・潘金蓮物語の舞台を、陽谷県ではなく清河県に設定したかったからだろうと言えることぐらいであろう。このことに関連して指摘しておきたいことは、武松が虎を退治した後に掲げられている一篇七言古詩である。この詩の句中に「清河壯士酒未醒」の一句があるが、「金瓶梅」では、すでに武松を陽谷県出身の人間に変えているのだから、ここもさしずめ「陽谷壯士酒未醒」と改めるべきであったと思われるが、実際は「水滸伝」で使われているものをそのまま借用している。後にも触れたいと思うが、このような安直さは、「金瓶梅」以外の白話小説にも広く普遍的に見られる傾向であるとはいえ、ここは、「金瓶梅」の作者の創作態度として見逃せない点の一つであろう。次いで、「金瓶梅」きっての妖婦潘金蓮の登場となるが、まず、彼女の生い立ちが述べられている。それに依れば、彼女は元々清河県南門外の潘仕立屋の娘で、幼くして父と死別し暮しが成り立たないので、まず王招宣の屋敷に売られた。

後にその王招宣が亡くなると、今度は金持の張旦那に転売された。ところが、張家では奥様の嫉妬に遇い家を追い出され、遂にただ同然で武大の嫁となったということになっている。ところで、この個所は、まったく「警世通言」巻16小夫人金銭贈年少に依っている。この「話本」は、張士廉という金持が、60歳をすぎても子供がいないのを嘆き、二人の仲人婆さんに頼んで、一人の若いお妾をもらおうということから話が始まっているが、第一、このお妾というのが、やはり王招宣の屋敷の女中上りであるという点で「金瓶梅」に似ているし、また、この張旦那がこのお妾をもらってから体にさまざまな不調をきたすという点も似ている。2回から5回までは、王婆の手引きによる潘金蓮と西門慶の不義密通、更には、金蓮と王婆とによる武大毒殺の話であるが、これらはすべて「水滸伝」の24・25の両回によっていることは、論を俟たない。このうち、口達者な王婆の人物形象は、今挙げた「警世通言」巻16中の王婆にも一面通じる所がある。また妻が自分の不義の発覚を恐れて自分の夫を毒殺するという話は外にもあり、例えば、「警世通言」巻24玉堂春落難逢夫にも見られる。この作品でもやはりその毒殺を助ける王婆という老女が登場する<sup>⑧</sup>。8回になると、武大の霊を弔う為の法要が行われる段となる。この法要には報恩寺から数人の僧侶が招かれるが、この時僧達が金蓮の妖艶な容姿にすっかり心を乱す個所は、「水滸伝」の24・25回には見えず、却って同45回の楊雄の妻潘巧雲と報恩寺の僧裴如海の不義密通の段に似る。「金瓶梅」は明らかにこの部分を踏襲している。第一、報恩寺という寺の名前も一致しているし、看官聴説以下に見える僧侶こそ色欲が旺盛であるという「金瓶梅」の談義も、「水滸伝」に見えるそれと論旨においてそっくりである。10回では、後で西門慶の第六夫人に納まる李瓶児の、花子虚の妻になるまでの経歴が書かれてある。その経歴というのは、李瓶児はもと太名府長官梁中書の妾であった。ところが、梁の正夫人という人はとても嫉妬ぶかくて、妾や女中を叩き殺しては死骸を奥庭に埋めていた。政和三年上元節の夜、梁山泊の豪傑の一人李逵が大名府を襲撃し梁一家皆殺しに及んだ時、李瓶児は梁家にあった宝物、西洋真珠百個等を盗んで逃げ、都東京の親戚の家に身を寄せたなどというものである。ところが、「話本」の中にもこれと似た話がある。「警世通言」巻14一窟鬼癩道人除怪は、幽霊妻にまとりつかれた呉洪という一書生の話であるが、この話の結末で一道人が現われ、術を使って幽霊の正体を明らかにする。それによって、「呉先生の奥さんの李楽娘は、秦太師府の三通判のお妾で、通判の種をやどし、出産で死んだ亡霊、女中の錦児は、通判の正夫人に嫉妬されて折檻を受けたために、われとわが首を刎て死

んだ者であった」ことが判明する。この話に出てくる嫉妬深い通判の正夫人は、「金瓶梅」の中の梁中書の正夫人に似ている。また既に挙げた「警世通言」巻16小夫人金銭贈年少は、張士廉の妾が若い番頭の張勝に好意を抱き、彼に百八個の西珠でできた数珠を渡すが、あとでこの数珠は、その妾がかつて仕えていた王招宣の屋敷から持ち出したものであることが判るという話であるが、この話に出てくる数珠は、李瓶児が盗み出した西洋真珠に似ている。恐らく「金瓶梅」の作者は、李瓶児の前歴を設定するにあたって、これら二つの「話本」からヒントを得たであろうことは大いに考えられることである。10回では武松の事件を裁く陳文昭が登場し、また14回では花子虚の事件を裁く楊時の登場となり、それぞれ清廉潔白の役人であることを説明する駢語が見えるが、これらはそれぞれ「水滸伝」26回の陳文昭と同13回の時文彬のひととなりを説明するに使われる文とほぼ同じものである。さて、14回の楊時は、号が亀山であると書いていることから、一見、実在の人物で北宋の儒者である楊龜山先生をモデルにしているかのようであるが、その出身といい、その経歴といいまったくのでたらめである。もっともおかしいのは、彼のことを蔡京の門下生としていることである。歴史上の楊時は、蔡京ら新法党を口を極めて批判しており<sup>⑨</sup>、蔡京の門下生であろうはずがない。ところが「醒世恆言」巻13勘皮靴單證二郎神を見ると、この「話本」では、楊時を蔡京の門下生だとしているのである。このことは、楊時を蔡京の門下生とする説が、宋時、講釈師の間で広く行なわれていたということを示すのではないかと考えられないこともないが、ひょっとして、「金瓶梅」の作者は、この「醒世恆言」巻13のもととなった話本を、どこかで見ていたのではあるまいか。因に、同「話本」の中に、五岳観の潘道士という道士が登場するが、「金瓶梅」62回にも、五岳観の潘道士という者が登場している。尚、この「醒世恆言」巻13と「金瓶梅」との関係は、あとで再びまとめる予定である。15回になると、呉月娘らが獅子街の李瓶児の家の二階で、燈籠見物をする段となる。「金瓶梅」はこのあと、24回と42回から43回にかけて、そして78回と都合4回元宵節の様子を描いているが、この15回の描写が一番臨場感がある。ところで、元宵夜の燈籠市のにぎやかさは、「話本」でもよく描かれる所である。例えば、すでに挙げた「警世通言」巻16や、「清平山堂話本」戒指児記、また「熊龍峯四種小説」張生彩鸞燈伝等は、いずれもその話の時代が北宋となっていて、元宵夜における若い男女の出会いを描くものであった。「金瓶梅」の作者の生きていた明代においても、元宵夜はにぎやかであったと思われるが、この作者は現実取材するよりも書物に取材する傾向の強かつ

た人かと思われる。この回で鰲山について言及しているが、この部分も、「大宋宣和遺事」宣和六年の条あたりをこの作者は参照している可能性が強い。因に「金瓶梅」46回冒頭にかかげる元宵節のことをうたった一詞は、「大宋宣和遺事」宣和五年の条に見えるものと同じである。また同回に見える燈籠市の眺めを説明する長い駢語は、その書だしを「水滸伝」33回において、宋江が花榮とともに清風寨で燈籠市を見物する時に使われている一文を利用している。20回から26回までは、来旺の妻宋惠蓮の物語であるが、このうち、26回西門慶が計を設けて来旺を陥れ提刑所に送りこむ局面は、「水滸伝」7回高俅が白虎堂で林冲を陥れる段に学んだものと思われる。宋惠蓮の自殺後、これに続く27回、西門慶と金蓮との翡翠軒での御乱行の一段との間に、大暑についての一談義が突如として挿入されている。このようにいささか唐突ぎみに新たなる話や談義を展開させている個所は、大抵、作者が何か素材に依っている個所と思われる。例えば、後の47回で、突如として苗天秀の話が出てくるが、これは、「百家公案」に依っていることは知られている所である。この談義も、「水滸伝」16回、楊志ら一行14人が、蔡京への誕生祝いの宝物を運搬して黄泥岡にさしかかった時、折からの暑さを述べる段に見える一文にもとづいている。さて30回に至り、西門慶は、山東清河提刑所副千戸という役人となり、警察官兼裁判官のような地位に就くが、34回で西門慶は、阮三の事件を手がける。ところで、この阮三の事件の顛末は、まったく「清平山堂話本」の戒指児記そのものであることは、すでに幾多の学者による指摘がある。47回から48回にかけては、苗天秀の物語であるが、これはすでに指摘したように、「百家公案全伝」巻50琴童代主人伸冤と題する話に基づいていることは、ハナン論文以来よく知られている所である。62回、李瓶児の病が篤くなると、魔除けのために五岳観の潘道士が西門家によばれる。ところで、「話本」には、主人公に女の妖怪が取り付くが、結末で一道士が現われて、術を使ってこれら妖怪を取り除くという一類の話があったようで、現存する「話本」のうち、「清平山堂話本」の西湖三塔記や洛陽三怪記、「警世通言」の巻14や同巻28、「熊龍峯四種小説」の孔淑芳双魚扇墜伝などは、いずれもよく似た話で、同じような結末、つまり道士が現われて妖怪を除くという結末で話がむすばれている。「金瓶梅」のこの個所は、道士の操る神将の描写をはじめとしてその多くを、「警世通言」巻14の文章に依っている。また、前に述べたように、五岳観の潘道士という固有名詞は、「醒世恆言」巻13のもとになった話本より借用したものと思われる。71回になると、西門慶は正千戸に昇進し、謝恩のために上京する。この回では、徽宗皇帝に対する

百官朝賀の様子が描かれているが、ここで使われている文章のほとんどが、実は「水滸伝」82回、梁山泊の豪傑達が招安に応じ、都で皇帝に拝する段からの借りものである。73回に見える薛尼の語る五戒禪師と紅蓮の物語は、「清平山堂話本」五戒禪師私紅蓮記の話を、簡略にして作品中に取り込んだものであることは、既に先人により指摘されている。79回になって、西門慶が荒淫の為体を壊して死ぬが、このあとの80回以降は、それまでと異なって、にわかに行先文学にその着想を借りることが多くなっているように見えるのは何故だろうか。話の舞台も、清河県から臨清に移る傾向も見られ、この80回を境として筆さばきにおいても、何か異質なものが認められるが、これは、作者とは別の人が80回以降の筆をとった為か、それとも80回の前と後とではその執筆時期が大部異なっていた為なのかといろいろと疑われる。しかし、この点に関する詮索は、稿を改めて論ずるとして、ここでは筋、着想における先行文学からの影響、ことに「話本」からの影響について、更に考察をさきにすすめたい。まず82回で、陳経済が金蓮と茶蘼棚の下で密会する個所は、これは「話本」からではないが、明らかに雑劇「西廂記」第三本三折から影響をうけていることを指摘せねばならない。84回、呉月娘が泰山に参拝して殷天錫という男に強姦されそうになる段は、既にハナン氏の指摘された通り、「水滸伝」7回で高俅の義理の息子高衙内が林冲の妻を誘惑しようとする段から着想を得ている。また、殷天錫という人名は、「水滸伝」52回からとってきたもので、州の太守高廉の妻の弟という点で一致している。続いて、月娘は清風山の王英に捕われ、やはり強姦されそうになるが、これは「水滸伝」32回の一段からとってきている。但し、「水滸伝」では、王英に強姦されそうになるのは呉月娘ではなく、清風鎮の奉行劉高の細君ということになっている。尚、この回での泰嶽廟のたずまいを描く駢語は、「水滸伝」74回、燕青が東嶽廟で任原と相撲をとる段に使われているものをそっくり使っている。また、「碧霞宮」の女神の容姿を描く駢語は、なんと「水滸伝」42回、宋江に天書を授ける九天玄女の容姿を描くものをそのまま使っている。86回になると、呉月娘がとうとう陳経済と潘金蓮との不義の関係を悟り、二人をひき離す為に、金蓮を王婆に引き取らせる。陳経済はこれを知って悔しがり、なんとかまた会いたいものと、王婆の家へ行って自分は金蓮の弟だと偽って会うとする。92回では、同じこの陳経済が、李衙内のもとに嫁した孟玉楼のもとに、やはり、「弟だ」と偽って会いにゆき、97回では、守備周秀のもとに嫁した春梅のところに、「母方のいとこ」（姑表兄弟）だと偽って会いにいつている。すべて話の発想が似かよっているが、恐らくこれも何か「話本」

から得たものではないかと疑われる。「古今小説」巻38 任孝子烈性為神は、これとよく似た話である。主人公の任珪は聖金という妻を娶るが、実はこの聖金は結婚する前に周得という男と関係があった。この話では、結婚して任珪のもとにいる聖金の所に、周得がやはり母方のいとこ（姑表兄弟）だと言って会いにゆくことになっている。「金瓶梅」の作者は、果してこの話に直接ヒントを得たかどうかは分らないが、このような類話が「話本」の中にあって、作者がそこから着想を得たことは、大いに考えられることであろう。尚、この「古今小説」巻38は、後述するように、やはり「金瓶梅」と何がしか関係のある小説と考えられる。87回、武松が再び清河県に戻ってくるや、金蓮を殺して兄の仇を討つが、この段は、明らかに「水滸伝」26回に基づいていることは論を俟たない。ついで次の88回、金蓮がもう死んでいるとは夢にも知らず、彼女を身請けすることのみを心にだいて王婆の家の門前に立つ陳経済は、そこで王婆のみならず金蓮までも死体となって埋められているのを見て大層驚くが、この個所は、明らかに「警世通言」巻16からその着想を得たものと思われる。「金瓶梅」では、陳経済は、すでに王婆の家の門が二本の槍で閉ざされており、おまけに門上には一枚の掲示がしてあるのに気付く。彼はそれを読もうとした矢先、背後より怒鳴りつける人の声に驚くということになっているが、「警世通言」の方も似ていて、張勝という若者が、元宵節の夜、かつて仕えた張員外の家の前を通りかかると、その門が十字に竹竿で閉じられ、さらに張り紙が張ってある。何が書いてあるか読もうとしたところ、突然背後から怒鳴る声に驚きその場を去るというもので、以下のように、文章まで相当似ている。

「警世通言」巻16	「金瓶梅」88回
<p>……迤邐信步行到張員外門前，張勝喫驚，只見張員外家門便開着，十字兩條竹竿，……照着門上一張手榜貼在。張勝看了，說得目睜口呆，罔知所措。張勝去這燈光之下，看這手榜上写着道，「……」方才讀到不合三個字，兀自不知道因甚罪？則見燈籠底下一人喝声道，「你好大胆，來這裏看甚的！」……</p>	<p>（經濟）來到紫石街王婆門首。可霎作怪，只見門前街旁，埋着兩個屍首，上面兩桿鎗交叉，上面挑着個燈籠。門首掛着一張手榜，上書「……」這經濟仰頭還大看了，只見從窩舖中鑽出兩個人來，喝声道「甚麼人，看此榜文做甚？……」……只見一個人頭戴万字巾……說道「哥哥，你好大胆，平白在此看他怎的？」</p>

90回になると、李貴、譚名山東夜叉という武芸者が登場するが、この人名はすでにハナン氏の指摘された通り、「清平山堂話本」楊温摺路虎伝より借用したものであろう。ところで、同じこの回に登場し、墓参帰りの孟玉楼を見初める李衙内という人物形象も、「水滸伝」7回で林冲の妻を誘惑しようとしたやはり同名の李衙内であろうと思われる。次いで、この後、家に戻った呉月娘らは、孝哥が高熱を出してグッタリしているのに気付き、急いで劉婆というヤブ医者と呼ぶことになっているが、これは48回の、やはり清明節の日墓参からの帰り官哥が高熱を出し劉婆を呼ぶ段の再述である。93回になって、陳経済が乞食にまで落ちぶれる所と、父の旧友である王杏菴老人に三度救われる個所は、それぞれ唐代傳奇小説の傑作「李娃伝」と「杜子春伝」からの影響が感じられるが、いずれも確証はない。また同回で、臨清随一の大酒楼を描写する駢語が出てくるが、これがなんと、「水滸伝」39回、宋江が酔ってその壁に反詩をしるした江州の酒楼潯陽楼を描写したものをそのまま使っている。96回には、城南の水月寺という寺名が出てくるが、これは女犯の僧の物語である「古今小説」巻29月明和尚度柳翠・同巻3新橋市韓五売春情からとってきたものであろう。97回で、陳経済は、春梅のいとこだと偽って守備府に入り、98回では、周守備の御威光によって今述べた大酒楼を乗っ取る。その後、韓道国夫妻とその娘愛姐の三人がこの酒楼にやって来て、楼の主人たる陳経済の許しも得ぬまま勝手に家財道具を運び込む一段が続くが、この部分は、既に明らかになっているように、「古今小説」巻3の呉山と韓金奴の話の焼き直しである。物語のストーリーのみならず、幾個所か字句まで鈔襲に及んでいることは、これまで幾多の学者によって指摘されているので、ここではその説明を省かせていただく。最後の100回になると、陳経済も死に、性欲を持て余した春梅は、下男の李安に目をつけ、乳母の金匱を通じてこの若者にこっそり50両の大元宝を渡す段が見えるが、この個所は、やはり「警世通言」巻16の張員外の妾と張勝の話をもとを得たものであることは間違いないと思われる。

以上をまとめてみると、「金瓶梅」は「水滸伝」の23回から同25回までの西門慶と潘金蓮物語に由来しているので、そこから直接多くの筋や発想を借りてきているのは当然の事だが、実際には、これ以外の諸回からも意外に多くの着想を得ていることが、以上から明らかになったと思う。「水滸伝」以外の「話本」では、今見たように(1)勿頸鴛鴦会(「清平山堂話本」)、(2)小夫人金錢贈年少(「警世通言」巻16)、(3)戒指兒記(「雨窗集」、「古今小説」巻4)、(4)一窟鬼癡道人除怪(「警世通言」巻14)、(5)五戒禪師私紅蓮記(「清平山堂話本」、「古今小説」

卷30)、(6)楊温擱路虎伝(清平山堂話本)、(7)新橋市韓五売春情(「古今小説」卷3)の以上七種が「金瓶梅」に影響を与えていると見られ、またこのことはこれまで先人によって指摘されてきたところでもある。しかし筆者はここで、以上七種の「話本」の外に、恐らく「金瓶梅」の作者がそれを参照し、その執筆にあたって着想を得たであろう「話本」に、次の兩「話本」があつたのではないかということを目指したい。それは、(8)任孝子烈性為神(「古今小説」卷38)と(9)勘皮靴単証二郎神(「醒世恆言」卷13)である。以下にそれぞれ「金瓶梅」への影響関係についてまとめておこう。

#### 任孝子烈性為神(「古今小説」卷38)

話は、南宋の光宗の紹熙年間のこと、都臨安に張という人の経営する菓屋があつて、その手代の任珪が、傘職人梁公の娘の聖金を娶つたことに始まる。ところがこの聖金は、かねてから近所の職人の息子の周得とできていて、任珪に嫁いだ後も周と密通を重ねていた。それで話は、あとでこのことを知つた任珪が、周得聖金の姦夫姦婦のみならず、聖金の下女の春梅、さらには聖金の両親の梁公夫妻の計五人を殺すに至るといふものである。

この作品と「金瓶梅」との関係は、まず先にも指摘したように、周得がすでに任家に嫁いだ聖金の所に、いとこだと偽つてたずねている個所は、「金瓶梅」96回で、春梅の所に陳経済がいとこだと偽つて会いにゆく段に極めて似ていることである。同じ陳経済が86回で金蓮のもとに「弟だ」と言つて会いにゆき、92回では、孟玉楼のもとにやはり弟と偽つて会いにゆくのも似ている。また、この作品の冒頭には、「参透風流二字禅……」で始まる七言律詩があるが、この詩は、「金瓶梅」5回冒頭にかかげるものに似ている。またこの作品は、「金瓶梅」によく使われているものとよく似た固有名詞が多く出てくることも注目される。まず人名では、作品の初めの方に出てくる張員外は、「金瓶梅」1回の張大戸に似ている。また、聖金の下女の春梅は、名前も同じだが、主人の家に姦夫の周得の手引きをしている点で、「金瓶梅」中の春梅に似る。また地名でも、臨安府清河坊は、「金瓶梅」の清河県に、牛皮街は、「金瓶梅」33回に見える牛皮小巷に似ている。また、作品では臨安府錢塘門に晏公廟があつたとなつてゐるが、「金瓶梅」93回には臨清にある廟として同じ廟名が出てくる。

#### 勘皮靴単証二郎神(「醒世恆言」卷13)

話は北宋末のこと、韓玉翹という人が選ばれて宮中に召され夫人となつたが、徽宗帝の寵愛を賜ふることのないまま、病氣となり、療養の為に殿前大尉楊戩のもとに下つた。ところがこの韓夫人のもとに、毎夜二郎神廟の廟官の孫神通

という男が二郎神に化けて現れて情を通じる。後で、孫が落としていった片方の皮の靴から足が付き逮捕されるというものである。

この作品と「金瓶梅」との関係が疑われるのは、次の二点に関してである。その一は、作品では、韓夫人の所にやってくる妖怪の正体を明らかにするために一人の道士が呼ばれるが、その道士を五岳観の潘道士だとしていることである。「金瓶梅」62回にも五岳観の潘道士が登場することは、既に指摘した。次に二は、これも己に述べたように、楊時（亀山先生）を蔡京の門下生だとしていることである。この点「金瓶梅」14回と一致する。この外に、「金瓶梅」30回で、「看官聴説、那時徽宗天下失政、奸臣当道、讒佞盈朝。高・楊・童・蔡四個奸党、在朝中壳官驚獄、賄賂公行」と述べて、北宋末における四人の奸臣を指摘しているが、この「話本」冒頭でも、「時許侍臣蔡京、王黼、高俅、童貫、楊戩、梁師成縦歩遊賞、時号宣和六賊」とあって、六人の奸臣を述べるあたりすこぶる似ていること等が挙げられる。

さて、現存する「話本」で「金瓶梅」と関係が考えられるのは以上の九編だが、実際には、作者はこれ以外の話本からもその筋や発想に利用していたことが大いに考えられる。しかし、既に相当量の話本が散佚してしまっていることが予想されているので<sup>⑩</sup>、「話本」と「金瓶梅」との関係に関するこれ以上の追求は相当に困難かと思われる。

最後に、以上の九編のうち(4)と(6)を除いた外の六編の「話本」に一つの共通点の認められることを指摘しておきたい。それは、いずれの「話本」も、男女の不義密通とか、荒淫で身を亡ぼすということをその内容としているということである。「金瓶梅」でも、西門慶が最も寵愛した潘金蓮と李瓶児は、いずれも西門家に入る前においても別の男の人妻だった女性達であり、後に西門慶がその触手をのばす宋恵蓮や王六児もまた西門家の下男や番頭の人妻である。してみると、「金瓶梅」もまた不義密通を扱った小説であると言える。そこで考えられることは、作者が「金瓶梅」を作るにあたって、その頃まで流伝していた「話本」のうち、これから書こうとするこの小説のテーマに近いこれら不義密通を扱った「話本」を広く集め、そこからいろんな着想を得たのではなかったかということである。

## 2. 詩詞駢語における鈔襲の傾向

「金瓶梅」に特徴的なことは、おびただしい素材がある時はそのまま、あ

る時は少し加工して使い、作品の各所にちりばめていることである。このことは、所謂、駢語ないし「挿詞」といわれるものや、作中に挿入されている詩詞に、「水滸伝」をはじめとする「話本」ですでに使われたものと同じものを沢山使っていることから言えるであろう。駢語とは、多くの「話本」の中で、人物の容姿や風景ないしある情景を描写する時に使われている多分に類型的な文章のことである。例えば、「警世通言」巻14では、日の暮れゆく様を描いて、次の駢語が使われている。

紅輪は西に墜ち、玉兔は東に生ず。佳人は燭を乗って房に帰り、江上の漁人は釣を罷む。漁父は魚を売って竹径を帰り、牧童は犢に騎りて花村に入る。

であるが、これと類似する駢語は、「清平山堂話本」洛陽三怪記や、「警世通言」巻16にも見える。このことから、これら駢語は大体類型的であって、本来宋代の講釈師がそれぞれ決った文句を暗誦していて、話の適当な局面で使ったものと思われる。「金瓶梅」においても、このようないわば伝統的な駢語が相当多く使われている。ではこのことは、「金瓶梅」も「水滸伝」等と同じくかつて何篇かの話本であって、それが集大成されたものであることを意味するのであろうか。結論から言うと、「金瓶梅」は、けっして「話本」を集大成したものではない。ある一人の人が、主に「水滸伝」を素材として用い書いたものであること。しかも、この作者には「水滸伝」中の駢語や詩詞を極めて安易に鈔襲する傾向が見られること等を指摘することができる。以下において、これらの点について明らかにしたいと思う。

まずは、この作者がどれだけ「話本」中の駢語や詩詞を利用しているか、表にあげてみる。表中、すでにハナン論文で指摘ずみのものも多いが、どれが指摘ずみのものであるかここでは一一注記しない。尚、調査した「話本」のうち、「大宋宣和遺事」は、「宣」、「水滸伝」は、「水」、「清平山堂話本」は「清」、「雨窗集」は「雨」、「古今小説」は「古今」、「警世通言」は「通言」、「醒世恆言」は「恆言」、「韓湘子全伝」は「韓」、「大唐秦王詞話」は「秦」とそれぞれ略称した。(類)とは類似の略である。また「金瓶梅」の頁数は、1957年文学古籍刊行社刊「金瓶梅詞話」の頁数を、「水滸伝」の頁数は1954年人民文学出版社刊「水滸全伝」の本の頁数をそれぞれ示す。

1回

- |  |   |
|--|---|
| <p>1. 「丈夫隻手把吳鉤…」 P47</p> <p>2. 「無形無影透人懷…」 (七絶詩) P55</p> <p>3. 「景陽崗頭風正狂…」 (七言古詩) P57 ~ 58</p> <p>4. 「柔軟立身之本…」 (西江月) P63 ~ 64</p> <p>5. 「金蓮容貌更堪題…」 (七絶詩) P70</p> <p>6. 「叔嫂萍踪得偶逢…」 (七絶詩) P74</p> <p>7. 「可怪金蓮用意深…」 (七絶詩) P76</p> <p>8. 「武松儀表甚擄搜…」 (七絶詩) P77</p> <p>9. 「万里彤雲密布…」 P78 ~ 79</p> <p>10. 「潑賤謀心太不良…」 (七絶詩) P83</p> <p>11. 「雨意雲情不遂謀…」 (七絶詩) P86</p> | <p>「清」 “勿頸鴛鴦会”、もと宋・卓田作の“題蘇小楼”詞 (「全宋詞」 P2481)</p> <p>「清」 洛陽三怪記、陳巡檢梅嶺失妻記、「水」 23回 P346、(類) 「通言」 卷14</p> <p>「水」 23回 P347</p> <p>「水」 79回 P1303</p> <p>「水」 24回 P356</p> <p>「水」 24回 P358</p> <p>「水」 24回 P359</p> <p>「水」 24回 P359</p> <p>「水」 24回 P360</p> <p>「水」 24回 P362</p> <p>「水」 24回 P363</p> |
|--|---|

2回

- |  |  |
|--|--|
| <p>12. 「苦口良言諫勸多…」 (七絶詩) P91</p> <p>13. 「他黑鬢鬢賽鴉翎的鬢兒…」 P95</p> <p>14. 「風日清和漫出遊…」 (七絶詩) P97</p> <p>15. 「開言欺陸賈…」 P103 ~ 104</p> <p>16. 「西門浪子意猖狂…」 (七絶詩) P108</p> | <p>「水」 24回 P365</p> <p>「水」 44回 P723 (類) 「古今」 卷36</p> <p>「水」 24回 P367</p> <p>「水」 24回 P369 (類) 「古今」 卷33、「通言」 卷16</p> <p>「水」 24回 P371</p> |
|--|--|

3回

- |   |   |
|---|---|
| <p>17. 「色不迷人人自迷…」 (七律詩) P109</p> <p>18. 「兩意相投似密甜…」 (七絶詩) P116</p> <p>19. 「阿母牢籠設計深…」 (七絶詩) P120 ~ 121</p> <p>20. 「水性從來是女流…」 (七絶詩) P126 ~ 127</p> | <p>(類) 「水」 21回 P307</p> <p>「水」 24回 P373</p> <p>「水」 24回 P375</p> <p>「水」 24回 P377</p> |
|---|---|

21. 「從來男女不同筵…」(七絕詩) P129 | 「水」24回 P378  
4回
22. 「酒色多能悞國邦…」(七律詩) P135 | 「水」24回 P355
23. 「交頸鴛鴦戲水…」 P137 | 「水」24回 P379～380、(類)「清」  
五戒禪師私紅蓮記、「國色天香」  
卷10上段張于湖記。
24. 「好事從來不出門…」(七絕詩) P145 | 「水」24回 P380  
5回
25. 「參透風流二字禪…」(七律詩) P151 | 「水」26回 P405、「古今」卷38、  
(類)「古今」卷3
26. 「虎有儻兮鳥有媒…」(七絕詩) P156 | 「水」25回 P395  
12回再出
27. 「雲情雨意兩綢繆…」(七絕詩) P162 | 「水」25回 P397
28. 「油煎肺腑…」 P166 | 「水」25回 P399、「秦」61回  
6回
29. 「可怪狂夫戀野花…」(七律詩) P169 | 「水」25回 P393
30. 「色膽如天不自由…」(鹿嶋天詞) P175 | (類)「水」26回 P407
31. 「烏雲生四野…」 P179 | (類)「水」52回 P866  
8回
32. 「密雲迷晚岫…」 P226～227 | (類)「古今」卷36
33. 「班首輕狂 念仏号不知顛倒…」 P231 | 「水」45回 P734
34. 「一個字便是僧…」 P232 | 「水」45回 P734
35. 「不禿不毒 不毒不禿…」 P232 | 「古今」卷30、「恆言」卷12
36. 「色中餓鬼獸中狨…」(七絕詩) P232 | (類)「水」45回 P739  
9回
37. 「色膽如天不自由…」(七律詩) P237 | (類)「水」26回 P407
38. 「眉似初春柳葉…」 P240 | 「水」24回 P357
39. 「無形無影 非霧非烟…」 P246～247 | 「水」26回 P409  
10回
40. 「朝看瑜伽經…」(五言律詩) P257 | 「水」45回 P731、「古今」卷34

41. 「平生正直 稟性賢明…」 P260 | 「水」 27回 P424  
11回
42. 「羅衣疊雪 宝髻堆雲…」 P289 ~ 290 | 「水」 51回 P840  
12回
43. 「一箇不顧綱常貴賤…」 P308 | (類)「水」 45回 P739
44. 「虎有張弓鳥有媒…」 (七絶詩) P311 ~ 312 | (類)「水」 25回 P395  
5回既出  
14回
45. 「為官清正 作事廉明…」 P365 | 「水」 13回 P194  
15回
46. 「山石穿双龍戲水…」 P388 ~ 389 | (類)「水」 33回 P516  
18回
47. 「堪嘆人生毒似蛇…」 (七律詩) P451 | 「水」 53回 P874
48. 「掃去只愁紅日短…」 (七絶詩) P458 | 「通言」 卷16  
19回
49. 「花開不損貧家地…」 (七律詩) P475 | 「水」 33回 P513  
94回再出  
20回
50. 「在世為人保七旬…」 (七律詩) P507 | 「水」 7回 P110  
97回再出
51. 「淡画眉兒斜插梳…」 (鷓鴣天詞) P512 | 「古今」 卷35回  
83回再出  
27回
52. 「頭上青天自恁欺…」 (七律詩) P695 | (類)「水」 8回 P123
53. 「県官貪汚更堪嗟…」 (七絶詩) P697 | (類)「水」 30回 P464
54. 「祝融南來鞭火龍…」 P698 | 「水」 16回 P230
55. 「赤日炎炎似火燒…」 (七絶詩) P700 | 「水」 16回 P233
56. 「四面雕欄石甃…」 P711 | (類)「水」 19回 P281  
30回
57. 「得失榮枯總是閑…」 (七律詩) P769 | 「秦」 18回

58. 「盆栽綠草 瓶挿紅花…」 P780  
97 回再出  
39回  
「水」 13 回 P193
59. 「青松鬱鬱 翠柏森森…」 P1022 ~ 1023  
42回  
（類）「水」 53 回 P882、「水」 42 回 P678、「清」西湖三塔記、洛陽三怪記
60. 「万井人烟錦綉围…」 (七絶詩) P1103  
79 回再出  
43回  
（類）「水」 33 回 P516
61. 「眉分八道雪…」 P1142  
46回  
「古今」卷 35、（類）「清」西湖三塔記
62. 「帝里元宵 風光好…」 P1187  
63. 「甘羅發早子牙遲…」 (七絶詩) P1222  
59回  
「宣」宣和五年の条  
「水」 61 回 P1023
64. 「湛湛青天不可欺…」 (七絶詩) P1619  
65. 「銀河耿耿 玉漏迢迢…」 P1624 ~ 1625  
61回  
「古今」卷 26  
「水」 21 回 P312 ~ 313
66. 「面如金紙 体似銀條…」 P1702  
62回  
「水」 52 回 P858、「熊」双魚扇  
鑿伝
67. 「黄羅抹額 紫綉羅袍…」 P1740  
68. 「非千虎嘯 豈是龍吟…」 P1743  
66回  
「清」洛陽三怪記、「通言」卷 14  
「通言」卷 14
69. 「星冠攢玉葉…」 P1847 ~ 1848  
68回  
「水」 53 回 P882 ~ 883
70. 「芳姿麗質更妖嬈…」 P1929  
71回  
「水」 81 回 P1335 ~ 1336
71. 「星斗依稀禁漏殘…」 (七律詩) P2041  
（類）「水」 82 回 P1347

72. 「九重門啓 鳴噦噦之鸞声…」 P2041～2042 「水」 82回 P1358
73. 「皇風清穆…」 P2042～2044 「水」 82回 P1357～1358
74. 「這帝皇果生得堯眉舜目…」 P2044 「宣」 建中靖国二年の条
75. 「非干虎嘯 豈是龍吟…」 P2048～2049 (類) 「通言」 卷14  
62回既出
- 72回**
76. 「寒暑相推春復秋…」 (七律詩) P2051 (類) 「秦」 12回、「韓」 23回  
75回
77. 「万里新墳尽十年…」 (七律詩) P2181 「古今」 卷29  
79回
78. 「太平時序好風催…」 (七絶詩) P2403 (類) 「水」 33回 P516  
42回既出
79. 「二八佳人體似酥…」 (七絶詩) P2415 「水」 44回 P723、「古今」 卷3、  
「韓」 5回
- 81回**
80. 「十字街焚煌燈火…」 P2478～2479 「水」 31回 P474～475  
100回再出
- 83回**
81. 「淡画眉兒斜挿梳…」 (七律詩) P2527 「古今」 卷35  
20回既出
82. 「一個不顧夫主名分…」 P2530 (類) 「水」 45回 P739  
12回既出
- 84回**
83. 「廟居岱岳 山鎮乾坤…」 P2537～2538 「水」 74回 P1243～1244
84. 「頭縮九龍飛鳳髻…」 P2539 「水」 42回 P678～679
85. 「八面峩峩 四圍險峻…」 P2549～2550 「水」 32回 P501
- 86回**
86. 「人生雖未有十全…」 (七律詩) P2577 (類) 「韓」 14回
87. 「荆山玉損…」 P2589 「水」 8回 P126

## 87回

88. 「平生作善天加福…」(七律詩) P2607 | 「水」 27回<sup>P423</sup>  
 89. 「手到処青春喪命…」 P2625 | 「水」 21回<sup>P317 ~ 318</sup>

## 88回

90. 「上臨之以天鑑…」(六言詩) P2629 | 「水」 36回<sup>P563</sup>

## 89回

91. 「風拂烟籠錦旆揚…」(七律詩) P2653 | 「水」 3回<sup>P47</sup>、(類)「古今」卷  
 98回再出 | 36  
 92. 「清明何処不生烟…」(七律詩) P2658 | 「通言」卷 16  
 93. 「山門高聳 梵宇清幽…」 P2663 ~ 2664 | 「水」 6回<sup>P102</sup>、「恆言」卷 31  
 94. 「一個青旋旋光頭新剃…」 P2665 | 「水」 45回<sup>P732</sup>

## 90回

95. 「報応本無私…」(五絶詩) P2693 | 「雨」 曹伯明錯勘賦記

## 92回

96. 「暑往寒来春復秋…」(七律詩) P2731 | 「水」 3回<sup>P43</sup>、(類)「恆言」卷  
 38、「韓」 23回、「秦」 12回

## 93回

97. 「山門高聳 殿閣峻層…」 P2774 | (類)「水」 6回<sup>P102</sup>  
 98. 「雕鸞映日 画棟飛雲…」 P2783 ~ 2784 | 「水」 39回<sup>P618 ~ 619</sup>

## 94回

99. 「花開不損貧家地…」(七律詩) P2789 | 「水」 33回<sup>P513</sup>  
 19回既出

## 97回

100. 「在世為人保七旬…」(七律詩) P2867 | 「水」 7回<sup>P110</sup>  
 20回既出(若干異なる)  
 101. 「盆栽綠柳…」 P2877 ~ 2878 | 「水」 13回<sup>P193</sup>  
 30回既出

## 98回

102. 「風拂烟籠錦旆揚…」(七律詩) P2899 | 「水」 3回<sup>P47</sup>(類)「古今」卷  
 89回既出 | 36

## 99回

103. 「一切諸煩惱…」(五言律詩) P2917 | 「水」 30回 P458

## 100回

104. 「勝敗兵家不可期…」(七絶詩) P2948 | 「水」 112回 P1684

105. 「十字街焚煌燈火…」 P2960 81回既出 | 「水」 31回 P474～475

「金瓶梅」で使われている駢語や詩詞のうち、「水滸伝」を含む各「話本」に  
関係を見い出せたものは以上である。一見しても分かる通り「水滸伝」との関  
係が最も深い。以下、この表から判明しうる点を二三指摘したい。

指摘しうる第一の点は、「金瓶梅」における各「話本」からの鈔襲の傾向であ  
る。多くの「話本」を見ると、どの作品にも似かよった駢語詩詞が沢山使われ  
ていて、一見して「金瓶梅」とあまり事情が変わらないように感ぜられる。だが  
「話本」の場合は、これら駢語の類は大抵講釈師の記憶に基づいて使われてい  
るのである。ところが「金瓶梅」の場合は、その使われ方がこれと明らかにち  
がう。駢語詩詞の中には、作者の記憶によったものもあったであろうが、それ  
にしても、このように沢山の駢語詩詞を記憶していて、その都度引き出したと  
は考えにくい。やはり、その大半は、作者が手元に「水滸伝」をはじめとする  
各「話本」を置いて、必要な時にそれらから抜き出し鈔襲してきたものと  
考えるのが妥当である。例えば、71回で、西門慶ら地方官が上京し、百官とと  
もに天子に拝謁する段で使われている駢語は、「水滸伝」82回に見える駢語、  
それは徽宗皇帝が宣徳楼上から、招安に応じて上京してきた梁山泊の豪傑達を  
御覧になる場面で用いられている駢語、と同じものが駆使されている。前掲の  
表で言えば、72・73の駢語がそれにあたる。ところで、このうちの73は、全  
文五百余字に及ぶ長文の駢語である。これだけ長いものを作者が記憶していた  
とは、とても考えられない。明らかに「水滸伝」から鈔襲したものと考えるべ  
きであろう。73について、「水滸伝」の駢語と比較してみると、少し書き換え  
られている所がある。それは、初めの方で光輝く宮殿を描写している個所で、「水  
滸伝」では

文徳殿燦燦爛爛，金碧交輝。未央宮光光彩彩，丹青炳煥。とある所を、「金瓶  
梅」では、

大慶殿・崇慶殿・文徳殿・集賢殿，燦燦爛爛，金碧交輝。乾明宮・神寧宮・昭陽宮・合璧宮・清寧宮，光光彩彩，丹青炳燦。と書き換えられている。ここに掲げられた宮殿名のうち、未央宮と昭陽宮（これはたぶん昭陽殿の誤り）が漢時代の宮殿名であり、大慶殿が、北宋時代、都の宮城に実際にあった宮殿名である<sup>④</sup>外は、すべてでたらめな名前である。「水滸伝」では文徳殿と未央殿の二宮殿しかあげられていないのを、「金瓶梅」で大慶殿以下九宮殿に増加させているのは、作者が宮城の情景をよりもっともらしく描こうとしたためによるものと思われる。この73の駢語に続いて、徽宗皇帝の容姿を描く74の駢語は、表に示した通り、「大宋宣和遺事」で徽宗が即位した個所で書かれている文章をそのまま鈔襲している。その鈔襲の目的は、やはり描写に臨場感を与え、表現をよりもっともらしいものにするにあったのだろうと思われる。ところで、このように先行する文学にたより、その一部を鈔襲する傾向の見られることは、作者の文人としての力量を大いに疑わせしむる材料の一つである。後述するように、この作者は果してすでに言われているような李開先とか屠隆といった一流の文人だったのだろうかという疑問が、このことから湧き出てくるのである。

さて、「話本」からの鈔襲は、駢語に限らず、詩においても見られる。「金瓶梅」の各回の冒頭には、主に七言律詩が掲げられていることが多く、その内容もそれぞれの回の内容と直接には関係しない教訓じみた処世観が述べられていることが多い。ところが、これも借りものが多いのである。従って、これらの詩を以て作者固有の思想と錯覚してはならない。4回・5回・6回・10回・18回・19回・20回・27回・30回・75回・87回・88回・89回・92回・94回・97回・99回のそれぞれ冒頭に掲げられている詩は、いずれも「水滸伝」をはじめとする各「話本」から鈔襲されたものであることは、表で示した通りである。「話本」の中には、散佚して今に伝わらないものも多いから、恐らく、他の回に見える冒頭詩も、外からの借りものが多いのではという疑いが強くもたれる所である。

さて、上掲の表より指摘しうることの二点めは、素材の出所が、「水滸伝」を含めて二ヶ所以上ある場合には、おおむね、「金瓶梅」は「水滸伝」の方によっていることである。例えば、2回で、潘金蓮を描写する駢語として使われているのは、表の13番で、

黒鬢鬢鬢鴉翎的鬢兒，翠灣灣的新月的眉兒，清冷冷杏子眼兒，香噴噴櫻桃口

兒，直隆隆瓊瑤鼻兒，粉濃濃紅豔腮兒、嬌滴滴銀盆臉兒，輕嫋嫋花朵身兒，玉纖纖荔枝手兒，一捻捻楊柳腰兒，軟濃濃白面臍肚兒，窄多多尖趂脚兒，肉奶奶胸兒，白生生腿兒，更有一件緊揪揪紅纒纒白鮮鮮黑裊裊，正不知是什麼東西。

とあるのがそれであるが、「古今小説」巻36では、張員外の家にいる一人の女性の容姿を描くものとして使われており、それには、

黒絲絲的髮兒，白瑩瑩的額兒，翠彎彎的眉兒，溜度度的眼兒，正隆隆的鼻兒，紅艷艷的腮兒，香噴噴的口兒，平坦坦的胸兒，白推推的妳兒，玉纖纖的手兒，細臍臍的腰兒，弓彎彎的脚兒。

とだけ見える。ところが、「水滸伝」44回では、楊雄の妻潘巧雲の容姿を描くものとして使われており、それには、

黒髮髮兒，細彎彎眉兒，光溜溜眼兒，香噴噴口兒，直隆隆鼻兒，紅乳乳腮兒，粉瑩瑩臉兒，輕嫋嫋身兒，玉纖纖手兒，一捻捻腰兒，軟濃濃肚兒，竅尖尖脚兒，花簇簇鞋兒，肉妳妳胸兒，白生生腿兒。更有一件窄湫湫，緊攆攆，紅鮮鮮，黒稠稠，正不知是甚麼東西。

と見え、明らかに「金瓶梅」の作者は、「水滸伝」の方によっていることが、これでわかるであろう。また、「金瓶梅」の駢語で、軟濃濃白面臍肚兒以下、実際には目に入らぬ部分にまで筆が及んでいることが注目されるが、これも「金瓶梅」の作者の独創ではなく、すべて「水滸伝」から借りてきたものであることも判る。この外、一一実例は挙げないが、表の番号で言えば、15・23・25・93の詩詞は、いずれも「水滸伝」の方によっていると考えられるものである。尚、「金瓶梅」の作者が「水滸伝」のどの版本によったかについては、すでに大内田三郎氏による御研究があり、それに依れば、「金瓶梅」の作者がよった版本は、「水滸伝」の現存する版本のうちでは最も古い万暦17年の序のある「天都外臣本」か、またはその祖本とされる嘉靖年間刊行の「郭勛本」であろうとされている<sup>⑩</sup>。

次に上掲の表より指摘しうることの三点めは、鈔襲における杜撰さである。例えば、2の七絶詩第四句目は「入山推出白雲来」とあり、これは文意が通らぬが、「清平山堂話本」や「水滸伝」では、いずれもこの句は「入山推出白雲来」となっており、こちらの方が文意が通る。また、47の七律詩の第一句目は、「堪嘆人生毒似蛇」とあるが、「水滸伝」53回では、「堪嘆人心毒似蛇」となっており、「水滸伝」の方が文意が明確であることは言うまでもない。また、96の七律詩の第三句目は、「運去貧窮亦自由」とあるが、これでは文意が通らない。ところが「水滸伝」3回の同詩を見ると、「運去貧窮亦有由」とあり、これならば

文意は通る。更に、103の五言詩の第五句目は「仏語戒無倫」となっているのに対し、「水滸伝」30回に見える同詩では、この句は「仏語戒無論」となっている。これも、「金瓶梅」の「倫無きを戒め」より、「水滸伝」の「論無かれと戒め」の方が文意が通る。いずれも鈔襲の際の杜撰な例である。今一一挙げないが、この外にも杜撰な鈔襲により文意が通らなくなったと思われる箇所は少なくない。このような杜撰さは何に起因するのであろうか。かねてより、「金瓶梅詞話」というこのテキストは、極めて誤字の多いテキストであることで定評のある所であるから、今挙げた魯魚亥豕の類のすべてがこの作者の杜撰な態度によるものと考えるのは早計であり、手稿が上梓された際に生じたとも考えられないこともない。しかし、今の所これら杜撰な直接の原因が、作者によるものなのか、それとも刻工によるものなのか、それを判断するすべもないのである。だがもし、これが作者によるものだとしたら、作者の文人としての素養を大いに疑わざるを得ないことになるであろう。筆者の印象では、これまで見てきたように安易に素材によって鈔襲する創作手法からして、これは、作者による可能性が高く、よってこの作者を一流の文人とは考えがたいのである。

## 結 語

以上見てきた所によれば、1、「金瓶梅」には、「水滸伝」を含む各「話本」より、その筋や着想面において様々なヒントを受けていたことが認められた。2、のみならず、作中これら「話本」より相当数の駢語・詩詞を鈔襲していることが認められた。3、またその鈔襲は、「話本」の中でも、ことに「水滸伝」から行なわれていることの多いことが判明した。の以上の三点が明らかになったが、ハナン氏の研究によれば、「金瓶梅」の素材は、これら「話本」の外に、文言の好色小説や犯罪小説、また戯曲や俗曲等からも広く認められるとされる<sup>19</sup>。恐らく、「金瓶梅」の作者の机上には、「水滸伝」をはじめとして、当時通行していた俗文学書が沢山積み上げられていたのであろう。

さて、すでに素材に借りものが多いとなると、今後「金瓶梅」を研究する上において、さまざまな問題が派出することが予想される。例えば、今後作中に出てくる固有名詞を考証する時には、大いに配慮を要することになる。例えば、「金瓶梅」93回に出てくる晏公廟は、臨清にある廟として書かれているが、この作者が、「古今小説」巻38のもとになった話本を参照して書いていたとするならば、臨安銭塘門附近の晏公廟より安易に名称だけ借用しているのかもしれない。そうであれば、舞台を山東省に限って考えなければならないこともなくなるのである。また、各回冒頭に見える七言律詩にも借りものが多いとするなら

ば、やはり、これらの詩をもって作者の思想を論ずることは危険なこととなる。いずれにせよ、「金瓶梅」という作品は、素材多用によりその性格をかなり複雑なものにしているといえよう。

最後に、この作者像について、私なりの推測を述べてみたいと思う。これまで縷々指摘してきたように、それが俗文学における伝統的手法とはいえ、作中に用いられている詩詞文辞のみならず着想までも先行文学から借りてきていることからして、どうもこの作者は一流の文人とは考えにくい。この点で、孫遜・陳詔両氏による「《金瓶梅》作者非“大名士”説—從幾個方面“内証”看《金瓶梅》作者—」（上海師大学報、1985年3期）で示された説<sup>⑭</sup>に賛意を表したい。但し、筆者の主張は一流の文人ではないだろうというだけで、作者はそれなりの文筆力をもっていた人ではあったらうと考える。例えば、「水滸伝」の一段から全百回にわたる長篇小説を創作したその構想力や、潘金蓮や春梅、李瓶児等さまざまな女性の性格を鮮やかに描きわける描写力など並の文才の持ち主ではなかったこともまた争えない事実である。

ところで、世に作者李開先説というものがある<sup>⑮</sup>。その主たる根拠は、67回に見える駐馬庁の曲辞や、70回に見える正宮端正好の套曲などが、いずれも李開先作の「林冲宝剑記」劇に出てくることである。また別に、作者屠隆説というものもある<sup>⑯</sup>。その主たる根拠は、56回に屠隆作と見られる戯文があるというものである。しかし、これら文名錚々たる文人達が、果して今回見たように、既存の「話本」等の文辞に安易に依って、それらを鈔襲しただろうか甚だ疑問である。「金瓶梅」の作中に李開先の戯曲「林冲宝剑記」にあるのと同じ曲辞が使われている事実を以て、作者を同じ李開先だと考えるよりも、むしろ「水滸伝」から沢山の素材をあおいでいるのと同じく、ある文人がやはり「林冲宝剑記」から引用したと考えるべきではなかろうか。屠隆の場合も同じことが言えるかと思う。では、作者はどんな人物であったのであろうか。確かに言えることは、「水滸伝」やその外の「金瓶梅」で利用され素材となっている書物を容易に手にすることができる立場にいた人物であったということであろう。王利器氏の最近の論文に依れば、「万曆野獲編」にいう蘇州でまず最初に「金瓶梅」を出版した人間は、「水滸全伝」120回本を出版した袁無涯であろうとされる。袁無涯が手にしていた抄本は、恐らくもと劉延伯家蔵もので、もともと53回から57回までの五回が欠けていた。それを袁小修の書写を経て袁無涯の手元に入ったものだろう。そしてその五回を補筆した人間も袁無涯であったらうとも推論されている<sup>⑰</sup>。「金瓶梅」を補筆刊行した人間が、真に袁無涯であったかどうか

については、今後更に確かめる必要があり、にわかには賛成しかねるが、清朝以前の所謂旧中国にあって、小説などを刊行する際、書店主などが勝手に文章に手を加えることがいくらかもあったというから、王氏のこの説も大いに考えられることと思われる。ところで、ここで大胆な臆測を言うことが許されるならば、王氏のこの説を一步すすめて、「金瓶梅」の作者も出版と何らかの関係をもっていた人ではなかったかと思われるのである。出版関係者であったなら、先に言った「金瓶梅」がよつたであろう小説や戯曲・俗曲などを、当然容易に手にすることが可能であったはずである。ともあれ、この点に関しては、何も証拠がないので、今はこのような貧弱な推測を述べるに止める。

本考の最初にも書いた通り、「金瓶梅」は、ある個人の作者がいて、その彼が「水滸伝」から着想を得て執筆した中国における個人創作第一号の長篇小説である。この点で中国小説史上特筆すべき作品と言える。しかし、その作品をよく観察すると、作中各所で伝統的話本や戯曲を素材としており、古いものの残滓を沢山内包していた。このことは、作品の筋展開や文辞に至るまで、すべて個人による創作といった近代小説は、急には出現し得なかったことを意味しているように思われる。

— 註 —

- ① 中野美代子「中国人の思考様式—小説の世界から—」（講談社新書、昭和49年刊）
- ② Patrick. D. Hanan, Sources of the Chin P'ing Mei, Asia Major new series Vol X part I. London 1963年
- ③ 拙稿『『金瓶梅』素材の研究(1)—特に俗曲・『宝剣記』・『宣和遺事』について—』（函館大学論究第19輯、1986年）
- ④ 話本とは、本来宋の講釈師達が講釈をする時に使った台本のことである。この話本は、元々手控えのようなもので、印刷されたとしても、恐らく粗末な紙になされ、部数もそう多く刷られなかったものようである。従ってこれが後世に伝えられることは難しかったとみえ、今日、正真正銘の話本というものは皆無である。ただ明代の中葉の嘉靖年間に洪楹という人が刊行した「六十家小説」の一部（「清平山堂話本」）が現存し、これが比較的忠実に宋代話本の原姿を伝えているものと一般には考えられている。本考で「話本」と称するのは、この洪楹の刊行した「清平山堂話本」等をさし、一部明末の人馮夢龍が刊行した所謂「三言」のうち、宋話本に由来すると思われる作品をも含めて言っていることを予めお断りしておきたい。また、ここで「水滸伝」を「話本」の中に含めて考察しようとするのは、羅輝の「醉翁談錄」小説開闢の条にも見える通り、「水滸伝」も元は、個別の銘々伝たる話本から出発し

たものであり、それらが集大成されたものと考えられるからである。

- ⑤ ここで駢語と称するのは、「話本」でよく「但見」の二字につづいて、人物の容姿や風景などを描写する時に用いられている一種の四六駢儷文を指している。これは、魯迅がその著「中国小説史略」第15篇でこれを駢語と称したのによる。別に鄭振鐸は「明清二代の平話集」の中でこれを「挿詞」と称している。
- ⑥ 「大宋宣和遺事」の「金瓶梅」への影響関係については、拙稿前掲論文（注③）を参照にされたい。
- ⑦ ハナン氏前掲論文（注②）、並びに魏子雲「金瓶梅詞話注釋」（増你智文化事業公司刊、1981年）
- ⑧ 但し、王婆の人物形象は、直接「水滸伝」から持ってきたものであり、「金瓶梅」の作者が、この「警世通言」巻24が基づいたと思われる話本から影響を受けたとは考えにくい。
- ⑨ 「宋史」巻428 楊時伝
- ⑩ 実際に都の盛り場で講釈芸が行なわれていた南宋時代において、どれだけの話本があったのかわからないが、その大凡を「醉翁談録」小説開闢の条で知ることができる。南宋で作られた話本は、元以降恐らく時代を歴るに従って次第に散佚し、量的に減っていったものと思われる。それでも、明代中期の嘉靖時代ぐらいまでは、相当数伝存していたようで、晁琛の「宝文堂書目」には、百種以上の話本の書名が見える。また恐らく話本の蒐佚家であったと思われる洪楙は、家蔵の話本60種を「六十家小説」として刊行している。しかし現存するものは少なく、譚正璧氏の「話本与古劇」によれば、「宝文堂書目」所載の話本のうち現存する「話本」は53種のみとする。また、洪楙刊行の「六十家小説」のうち、現存までに発見されたのは27種のみであり、その他は散佚したものと思われる。
- ⑪ 「宋史」巻85 地理志
- ⑫ 大内田三郎『『水滸伝』と『金瓶梅』』（天理大学学報）第85輯、昭和48年3月）、尚、同じ結論は、黄霖「〈忠義水滸伝〉与〈金瓶梅詞話〉」（『水滸争鳴』第一輯所収、1982年4月）や、王利器「〈金瓶梅詞話〉成書新証」（『金瓶梅研究集』所収、1988年1月齊魯書社刊）でも示されている。
- ⑬ ハナン氏前掲論文（注②）
- ⑭ この論文では、次の三点から、作者はとても大名士とは考えにくいとする。
- (1) 各回目の字数があわず、その文句も粗雑で、文人の作とは思われない。
  - (2) 「金瓶梅」中の詩のほとんどが劣作であり、詩句中に方言土語まで入っていたり、同じ詩が重出することもあり、また他人の詩を剽窃していることもあること。
  - (3) 登場人物に関し、朱勳や六黃太尉ら上層階級の人物の発言は一言も載せず、彼等に対する描写も平板なのに対し、韓道国・王六兒・来旺・謝希大といった下層階級の人物の描写は却って生き生きしている。作者は、下層階級のことを熟知していた人物にちがいがなく、大名士ではないであろうとするものである。陳詔氏には、別に「《金瓶梅》人物考—兼談作者之謎—」（学術月刊1987年3月号）があり、金瓶梅の登場人物から作者の素姓を推測され、

同主旨の結論を出されておられる。

- ⑮ 徐朔方「《金瓶梅》の写定者は李開先」（「杭州大学学报」〈社会科学版〉1980年第1期）、日下翠「《金瓶梅》作者考証」（「明清小説論叢」第3輯所収、1985年、春風文芸出版社刊）、卜鍵「金瓶梅作者李開先考」（1988年、甘肅人民出版社刊）
- ⑯ 黄霖「《金瓶梅》作者屠隆考」（「復旦学报」〈社会科学版〉1983年3期）同「《金瓶梅》作者屠隆考続」（「復旦学报」〈社会科学版〉1984年5期）、魏子雲「金瓶梅原貌探索」（1985年、台湾学生書局刊）同「金瓶梅的幽隱探照」（1988年、台湾学生書局刊）
- ⑰ 王利器前掲論文（注⑫）参照

（1989年9月25日受理）